校友時報

昭和46年7月23日
編集人兼発行所
秋田県能代市辻分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大勝堂印刷所

文化祭の準備始まる

期日改正される
十月八、九、十日予定

まだずいぶんと先の話のようではあるが、すでに文化祭の実行委員（クラスの生徒委員、企画部）会が結成され、行動を開始している。まだ七月じゃないか、文化祭が十月ごろとしても三月近くあるのにいまからそんなにあわてなくとも、二学期に入ってからでも……。と言う声を聞くことがあるが、けっして早い訳ではない。すぐ前には夏休みがあり、夏休みが終わると九月も同然。そんな訳だから、十月八、九、十日と予定している期日には一カ月ぐらいしかないのである。文化祭を成功させ、かつ、今まで以上のものにするにはどれくらい早くから計画を立てなければ間にあわないのである。

だがこの前夜祭もきめて、十月八・九・十日の予定期日は変更になったものである。初めの計画では、十月一・二・三日であったのだが生徒の間で、特に二年生の間で不満の声が出た。と言うのは最終日の十月三日は公務員試験があり、受験生にとっては、文化祭どころではない訳だ。文化祭とはすべての生徒が参加し、楽しまなければ意味がないのだから、三年生にとっては最後の文化祭になるのであるのだから期日を変えてほしい。との声が、一、二年からもかなり出た。そんな訳で少数者の意見ではあるのだが、実行委員会で再度検討しなおし、改正したのである。このことは生徒全員が実行委員であることを十分に意味していることであろう。

毎年そうなのだが文化祭に参加する者としない者との仕事量の差が激しく、去年は特にその傾向が著しかった。参加者は微々然のようである。

次に前夜祭であるが、前夜祭は去年たいへん好評だった、フォークダンスをする予定である。（ただし雨がふらないかぎり）しかし踊り方を知らない人がわりと多くいた。今年はそんなことがないように、せめて前日だけでも踊り方を教えてもらえたら――。と言う声がある。これはずいぶん大切なことであろう。なぜなら、その場で教わりながら踊ると言うことは、ずいぶん困難であるから。だが中には女性から教わることが、楽しみでやるんだと言う人もいるかも知れないが。このことは実行委員会の方でも十分に知っておいていただきたいことである。

食堂、喫茶の方ではまだ具体的には決まってはいないようではあるが、一応、去年同様文化クラブに属していない女性が当ることになるであろう。喫茶の方は、去年とれといった問題はおこらなかった。だから今年も同じ形式で行なわれるであろうと思われる。

食堂は、ウェーターだったことから、たくさんの外部からの意見があった。「校友時報」の二三号を見ていただければわかるのだが、そのことはわが校の女子の人数からして、やはり今年もまたウェーターとなることはまぬがれないことであろうと思われる。これはわが校が男子校的な存在であるからやむをえないことであろう。

とにかく実行委員会が開始された今、いろいろな問題はあるが、われわれの意見も十分に取り入れていただきたい。

ことばのエチケット

最近我々は、話すことへの不安とか、ものを言うことに対する恐れなどというものがなくなった。町で会った見知らぬ人にでも平気に話しかけるし、いろいろなテスカッションの場でも自分の意見を、顔も赤らめずにハッキリと言う。このような傾向は、確かによいことである。が、しかしよくない反面、ことばにもエチケットがあるということが忘れられているようである。

『ことばにもエチケットがある』……何か堅苦しいようで、我々には敬遠されそうだが、人と人が会話を通じて生きていくには必要なものなのである。

人間は感情の動物であるから、話す方でも感情が伴うし、聞き手の方でも感情を交えて聞くのである。この時、聞き手が不快な思いをするようなことは使いたくない。慎むよう努力するべきである。

たとえば相手をからかってみようとして、ごく軽い気持ちで、ハゲとか、デブなどと言ったとしたら、聞き手の方では悪気があっていったのではないとわかっていても、もし内心にそのことばへのこだわりがあると、顔のうわべでは、笑って受け答えをするが、心の中では、気にかけて、不快をおぼえるものである。

また、あることばによっては、相手の立場をなくしてしまうようなものがある。バスの見習車掌が、大勢の客の前で、停留所の呼び名をまちがえてしまい、客に大声で笑われ、いやなことばをののしられている人いうことがよく見受けられる。見習車掌はどうすることもできなくて、ただ下を向いて顔を真っ赤にしているという次第である。

このようにちょっとしたことばの使い方で相手を傷つけたり、立場をなくしてしまうような事がしばしばある。相手の立場を考えた思いやりのあることば使いで話すなら、このようなことにはならないだろう。

敬語にもエチケットがあるが、我々は、敬語の使い方が苦手であるというよりは面倒くさがっているのである。敬語は複雑であるから、だんだんやすらわしく感じられるのである。中には、封建社会の名残りである敬語をやめてしまえという人もいるが、最近では、戦前のような身分関係を表わす敬語や、皇室に対する敬語も、かなり民主化されて、比較的自由で簡単になってきているので、その場に合った正しい敬語は覚えていくのである。

これから先、社会へ出て活躍していく我々にとって、会話はますます重要になってくるだろう。ことばのエチケットをわきまえた、正しい意味でのじょうずな話し方を身につけようではないか。

（T）

能高祭を成功させよう

夏休みを前にして、すでに能高祭のために生徒委員、企画部は行動を始めている。ところで、ここで昨年の能高祭をふりかえってみて、今年のためにいろいろ問題点を挙げてみたい。

昨年はデコにしろフォークダンスにしろかなり好評だった。しかし、その中にもマンネリ化がなかったわけではない。暗い影が多い。音楽物の集中、開始時間が遅い…。なぜなら。あの暑いさなか暗くばかり多かったことは皆知っていることであろう。暗室もフィーリングの一つなのかも知れないが、スカッとしたあっけらかんとした対話の多い企画があってもよかったのではないだろうか。対話と言うことばを出したが、なるほど例年対話が少ないように思われる。単に見てもらう、面白いものを聞いてもらう、だけではないだ…。なぜなら。あの暑いさなか暗くばかり多かったことは皆知っていることであろう。暗室もフィーリングの一つなのかも知れないが、スカッとしたあっけらかんとした対話の多い企画があってもよかったのではないだろうか。対話と言うことばを出したが、なるほど例年対話が少ないように思われる。単に見てもらう、面白いものを聞いてもらう、だけではないだろう。異色的、個性的なのは大いにけっこうだが、やゝもすれば自己満足に陥りやすく、ほかの人々は傍観者になってしまう危険がある。この点デコなど計画しているかたはよく考えていただきたいものである。各デコによって開始時間がまちまちで、見られなかったと言う意見もあった。これは大いに反省すべきことだ。生徒会のほうでもこの点一考する必要がある。

能高祭は、もう少し先のことではあるが、すでに計画を立っている人もいるであろう。今年の能高祭をより良いものにするにも、われわれ一人一人の気持ちと意見を、反映していきたいものだ。

新聞部では〝声〟なども設置しているので、これらも多くに利用していただきたい。

（須合）

蚊帳の季節

国語科 野中 堯

激しい雨が去って、肌寒いほどの一日だった。

ふん切りのつかぬ梅雨の気配が一気に昇華したというのであろうか。そんな気にさえなるすがすがしい夜、ひとしお蚊帳の触覚がなつかしくなる。

ところで、蚊帳は夏の季節のもの。そして夏にはやはりそれだけの光と陰がある筈だ。濃い、街角のかげりのあいと朝日の光――少年の頃の僕に夏はそんなさわやかさを教えてくれた。そのころあの麻で作った蚊帳の香りにはラフカデオ・ハーンの幻がゆらめいた。

なぜ昔の今はなつかしいおとぎ話の時間は、薄暮の蚊帳の中だった。

夏、海沿岸年団の合宿訓練で帝国海軍二十宣の目を盗んで西瓜を友にすごしたのもやはり蚊帳の中だった。

今僕の使っているのはビニール製の蚊帳である。だから麻のあのなつかしい香しい肌あいはないのだが、然し何も僕は昔をなつかしむために蚊帳を使っているのではない。

今さら蚊帳を使うなんて――ある近しい中年の御婦人から言われたことがあった。なるほど彼女は蚊帳などというものは使っていないらしい。そのかわり彼女の生活は殆んど全て薬品であった。身辺全て薬なのだから勿論虫は寄りつかない。――だが昨年の夏その御婦人と同席することになったある子供は蚊化ゼンソクに罹った。

子供をゼンソクにしてまで薬品を弊用しなければならぬというのは――結論は簡単、家の周囲に虫の発生源がいくらでもあるからである。今更蚊帳なんて――、なぞと意識ぶってみた所で、蚊帳になるほど、薬を散布しなければならぬのが、僕らの住んでいる現実だと思う。

今、僕はできうる限り薬は使わぬようにしている。ビニールの蚊帳に入りながら、江戸小咄の幽霊やロクロ首などの表情を思い浮かべ――、その時、窓の外を通過するのは、なんだ、タンプカーではないか。

時評

▼「制帽自由」これは今日、どの高校でもさかんに論じられている問題である。県内では、秋田高校で実施されているほか、県外特に関西方面の高校は大部分が自由化されているという話である。それらの内には制服も自由である高校もなくない。そんな中でわが校もその制帽自由化の気運が高まりつつある。六月二十八日の生徒委員会で制帽自由化についての緊急動議が出されれ以来、各クラスではさかんにそのことが話し合われた。しかし、生徒会でこのことを改正案とするにも決定的な提案理由はなく、着用したくないという主観が先に立ち提案理由がこじつけのようになってしまったのである。もっと考えれば、また秋高の場合などを参考にすれば提案理由も出てくると思ったのだが――。▼一方、学校側も「制帽は着用しなければならない。」と言う決定的理由はなく、学生らしくないとか、そうすることはわが校だけの問題だけではなくなる。などとあいまいな理由をつけている。▼ここで同じように制帽の自由化が問題となっている横手工業高校の場合を考えてみようと思う。同校では自由化賛成の理由として必要性を感じない「小学校から今まで十年近く帽子を着用してきたが必要性を感じたことはない。」また反対の理由としては「学校の名誉のために」とか「学生らしさ」「学校の秩序が乱みにじられる」（横手新聞『つた』より）といった具合である。やはり同校にも決定的な理由はないようである。▼それでは双方とも決定的な理由がないのにどうして制帽着用の義務があるのであろうか。これはあくまでも主観であるが校内外の世論、教師の考え方、伝統というものがその義務をバックアップしているのではあるまいか。▼たかく、この制帽自由化論争はわが校だけではないのだから、他校の例なども参考にして双方ともじっくり、討議する必要があるのではあるまいか。

学生のみせ
キラヤ
畠町
2-5535

メガネの カモヤ
畠町 T 2－3740

パネル張り
彫刻
西巻写真工房
追分町

秋林運動具店
北校通り T ② 3257

※金物なら何でも！
三共金物店
畠町 T ② 5271

機械器具
文具 紙
事務
清
塚
畠町
T 2－4351

○○○○○
夏のオシャレは時計から
○○○○○
吉田時計店
柳町 T ② 5573